

歴史街道推進協議会 事務局顧問

真木

MAKI Yoshihiro

嘉裕

さんに聞きました

通商摩擦から始まった 歴史街道構想

——そもそも歴史街道計画を始めたのは、どのようなきっかけからだったのですか。

真木——一九八六年のことです。松下幸之助氏が主催していた「世界を考える京都座会」で、堺屋太一氏はじめご出席の先生がたから通商摩擦で日本が酷評されているが、日本のすばらしさを知らせるため、もっと日本の歴史文化を海外に発信していこうという話になり、「歴史街道構想」が生まれました。関西には伊勢の神話の時代から飛鳥の古代、奈良時代、京都千年の都の時代、大阪の町人文化、神戸の文明開化と、つながった歴史があります。しかも関西は国宝の六割、重要文化財の五割、国の指定した名勝史跡の三割があ

る、まさに歴史文化の宝庫です。それらを土台にして歴史街道という名前をつけ運動を始めることになったのです。

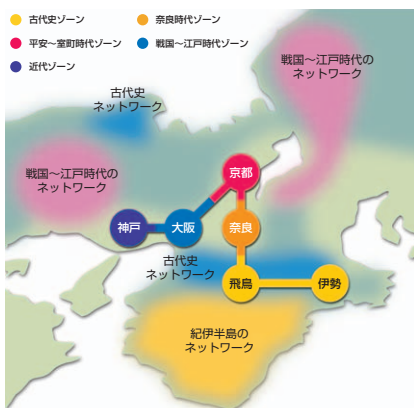
一九九一年には関西経済連合会が音頭取りをし、学識経験者、旧建設省をはじめ中央省庁、地方自治体、会社関係などが参加して歴史街道推進協議会がつけられました。歴史街道計画の目標としては「日本文化の発信基地づくり」、「新しい余暇ゾーンづくり」、「歴史文化を活かした地域づくり」の三つの柱が明示されました。

飛鳥・宇治に モデル地区をつくる

——歴史街道というのは、具体的な街道というよりは、時間軸も混ざったエリアのようなものですね。
真木——伊勢から飛鳥に至る「古

代史ゾーン」、「奈良時代ゾーン」、「平安〜室町時代ゾーン」、そして大阪の「戦国〜江戸時代ゾーン」、神戸の「近代ゾーン」というように、厳格な道ではなく、ゾーンのなとらえ方をしています。

しかし、歴史街道といっても、市町村としては何をしたらいいかわからないという問題点が出てきました。そこで、観光とは何かということを原点にたちかえって考えることにしました。観光という言葉が初めて表れたのは、中国の古典「易经」です。そこには、「王者たるものは国の光を海外に広め、他国に光があればそれを観に行きなさい。他国の光を観て来たものを賓客として大事に扱いなさい」ということが書かれています。光とは、その国の誇りとすべきものです。それをPRすることで他国から尊敬されるようになるのです。



そこで、「歴史・ロマン」、「景観」、「アクセス」、「ショッピング」、「グルメ」、「ホスピタリティ」の六つの attractiveness (観光客誘致要素) を郷土の誇りに掲げました。そして、どれにスポットを当てるかという「Light Up」。それに価値を与え意味づけをする「Meaning」。いい名前をつける「Naming」。実際の「Operation」として、歴史街道計画の目標としている三つの柱の①情報発信基地づくり、②余



聞き手
溝渕利明
編集委員



暇ゾーンづくり、③歴史文化を活かした地域づくりを進めていくことにしました。先ほどの英文の頭文字をとったLMNO戦略を各都市が定めて、都市の品格を高めていくことにしたのです。

——歴史街道ではモデル地区をつくられていますね。

真木——「これが歴史街道だ」とわかるモデル地区をつくらうというので、すでに五十地区に及んでいます。最初にとりあげたのが、古代の「飛鳥」と、平安文化のある「宇治」の二つだったんです。ここでは宇治のケースについてご説明します。宇治市

では市民へのアイデア募集からLMNO戦略を始めました。二七九点のアイデアの中から検討して、『源氏物語』の最後の十帖が宇治を舞台にしているということによって「源氏物語のまち」ということに決めました。そこで、国と京都府と宇治市と住民で役割分担をしました。たとえば宇治川の親水修景護岸は国が整備をし、京都府では王朝風の宇治橋やバイパスを整備しました。宇治市は宇治駅から平等院に至る参道を石畳にし、電柱の地中化や、宇治十帖の古跡を訪ねる散策路などを整備し、地元のお店街が参道

のアーケードをつくりました。その結果、観光客が増え、土産物屋など地元商店街の経済効果も上がりました。地元の人たちも、宇治大田楽まつりを復活させ、毎年開催するようになりました。そういうことで、地域住民にも喜ばれ、来られる方にも喜ばれ、市の品格も上がっていききました。

住民に夢を与える 土木を志してほしい

——まちおこしの成功の秘訣は何ですか。

真木——まちおこしの成功には共通点があります。第一点は「地元住民より盛り上がりつつくる自助努力」です。どこのまちにもリーダーがいます。その方々に参画願えるかどうかによって成否が決まります。第二点は、「その地域の誇りとすべき歴史文化資源を活用した」ということ。これは先ほどの例では、「平等院」とか『源氏物語』を活用したということです。第三点は、「新しい attractivenessを創造し、増幅した」ということ。第四点は「行政によるバックアップ。官主導でないのが特徴」です。第

五点は「継続は力なりといわれるように、十年前後の時間をかけて、官民協力して取り組んだ」と。宇治でも言い出してから出来るまで十四年かかりました。ほかに近江八幡のまちづくりとしてまちの発展の歴史を継承する八幡堀の保存修復も十四年くらいかかりましたし、彦根市の古くて新しい城下町「OLD・NEW TOWN」のまち並みの復元でも同じくらいかかっています。

私が土木に携わる人たちにお願したいのは、これからは経済効率だけでなくシビックデザインを心がけてほしいということです。良・強・美。使い勝手が良く、強いもので、地域の歴史、文化、景観にマッチする美しいものにしてほしいのです。そして、地域住民とともに進めるPII (Public Involvement) と、技術オリエンテッドでなく住民に夢を与えるIID (Information Diplomacy) が大切。こんなにいいものができる、こんなに地域が良くなるというように、住民に夢を与える土木を志してほしいと思います。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。